

コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金実績報告（公開用）

令和3年2月28日

項目	内容
事業者名	特定非営利活動法人 京都ホームシェアリングクラブ 理事長 小林晴夫
補助事業テーマ	地域密着・循環型新観光ビジネス創出調査
事業実施期間	令和 2年 10月 12日 ～ 令和 3年 2月 28日
事業の目標	① 地域循環型「コ・リビング」プログラム造成のための調査 ② 「コ・リビング」プログラム提供のための手法調査 「コ・リビング」対応の交流型民泊事業者増のための手法調査
事業の実績(成果)	<p>今回は緊急事態宣言期間が長く、実際のモニターの受け入れはできなかったが、「記述式アンケート調査（グーグルフォーム）」でモニター予定者の10組中9組からのアンケート①では、「京都観光に求めているもの」では、頻度が高いキーワードは神社仏閣であるが、食、癒し、町並み、そして触れ合うことに期待していることがうかがえた。②で行ったアンケート結果より、異日常を体験したい、そのまちの暮らしを知りたい、価値のある観光がしたい、また移住を考えるには良い機会のプログラムといった声が多かった。実際どこでこのプログラムを申し込めるのかという問い合わせもあった。単なる暮らしの紹介ではなく、観光とまちづくりの二つのカテゴリーに分けて発信していくことが必要ではないのかと思った。</p> <p>コ・リビングのモニター用プログラムについて、京都市南区で簡易宿所の運営者は「持続可能な観光」のセミナー後、宇賀神社の掃除を思いついたとしている。宇賀神社は担い手もなく高齢の住民が守りつづけている。こういった暮らしを知ってもらうこと、まちに還元することをセミナーで感じたという。「持続可能な観光」で各地域の事例などを宿の運営者だけでなく旅する人も一緒に学ぶことで、新しい観光が生まれるのではないかと感じた。</p>
今後の展望	<p>コロナ社会を経験したこともあり、人々は今までの暮らしを考え直し普通の暮らしがいかに幸せかを感じていると思う。その中で、「京都＝きらびやか」とは一線を引いた「普通の暮らし＝異日常」を滞在しながら体験してもらう観光は主流になると考える。もっという地域に根付いた民泊（簡易宿所・住種）だから「異日常」の体験を提供できると思う。</p> <p>2021年も引続き厳しい助教が続くと予測されるが、この期間中、オンラインでコ・プログラムの紹介を実施し、次の年につなげていく試みを考えている。</p>